

演題番号：E1

## 兵庫県におけるツキノワグマにみられた *Hepatozoon ursi*

○大田康之<sup>1)</sup>，片山淳之介<sup>1)</sup>，野口和人<sup>1)</sup>，石川修司<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 森林動物研究センター <sup>2)</sup> 兵庫県庁

1. はじめに：ヘパトゾオンは、一般的にマダニ等の吸血動物が媒介する原虫であり、哺乳類や鳥類等を中間宿主としているが、人への感染は起こらないと考えられている。今回、有害鳥獣捕獲許可により捕獲(以下、有害捕獲)されたツキノワグマ(以下、クマ)に病理組織検査を実施したところ、*Hepatozoon ursi*(以下、H.ursi)と思われる原虫がみられたため、感染状況等について調査をした。

2. 材料と方法：2020年6月から2021年10月まで、有害捕獲後に殺処分されたクマ10個体を用いて、解剖時に肝臓、心臓、腎臓、肺、脾臓と付属リンパ節等の病変を検索し、肉眼所見がみられた場合はその部位を、みられなかった場合は各臓器の実質、間質が入るように組織を採材した。標本は20%中性緩衝ホルマリン溶液で組織を固定後、定法によりパラフィン切片を作製、ヘマトキシリン・エオジン染色を実施し鏡検した。原虫様構造物がみられたときは、過ヨウ素酸シッフ反応(以下、PAS)を実施した。

3. 結果：解剖所見では10個体において肺に顕著な異常はみられなかったが、病理組織検査において全例で軽度の間質性肺炎と9個体でPAS陽性の原虫を確認した。確認されたシ

ゾントの形状と大きさ( $46.5 \pm 14.9 \times 43.5 \pm 14.2 \mu\text{m}$ ；長径×短径，平均±SD)と、組織への病変形成が乏しいことが、H.ursiと一致したことから、H.ursi感染事例と考えられた。シゾントの形態は幼若なものから成熟したものまで多様であった。また感染個体の年齢に偏りがなかったことから、H.ursiは広く浸潤していると考えられた。H.ursiは、東日本で分布していることが知られているが、今回、県内に生息する2つの地域個体群において、おそらく初めて確認された。

4. 考察と結語：野生鳥獣の肉は、消費者の知識不足により適切な処理をせずに食したことで、全国では、依然としてトリヒナ等の食中毒事例等がみられており、県では衛生的な取り扱いの推進を図っているところである。今回、特異的な肺病変がみられなかったことから、解体時にH.ursi寄生を疑って排除することは困難であった。クマの肺は食用に利用する機会は少ないが、食肉を介したH.ursiの人への影響が不明であることから、万一、食用として利用する場合は十分な加熱処理の必要があると考えられた。